

フランス〜ドイツを巡って



中電技術コンサルタント株式会社
原子カプロジェクト室

岩田 直樹
IWATA Naoki

はじめに

日頃は原子力設備や地盤の耐震解析に従事しているが、「平成24年度建設コンサルタンツ業務・研究発表会」の募集案内を見て、募集していた分野とはやや異なるが、日頃の成果を広く知ってもらいたい良い機会だと思い応募、発表した。この結果、思いがけず最優秀賞を頂き、その副賞として当海外調査に参加することになった。しかしながら出発までに約1ヶ月しかなかったためバタバタと業務調整を行い、会社の仲間と発注者の協力と理解を得て無事に旅立つことができた。

今回の視察は、港湾施設、環境保全とまちづくりおよび都市の再開発が主なテーマであり、日頃は計算機をガリガリまわしている私にとっては、非常に新鮮で、別の視点で多くを感じさせられる刺激の多い旅であった。

視察の概要

平成24年8月22日～9月1日の11日間で、フランス・パリに到着後、一路TGVで南仏へ向かい、マルセイユから地中海沿岸を東へ移動し、イタリア・ミラノから北上してスイス、ドイツを巡る旅であった。今回は公式訪問が少なく、街を散策する時間が多かったこともあり、現地の空気を



写真1 マルセイユの街並み

良く感じる事ができた。また全行程のほとんどがバス移動であり、通常の旅では見ることができない都市郊外や田舎のインフラ整備や景色を細かに見る事ができた。

南フランス：美しい街並みと古代ローマ遺跡

南フランス、イタリアは、街全体の色彩が鮮やか美しく、バカンス時期ということもあり多くの人で賑わっており活気があった。これは、南仏の温暖な気候と太陽の光のせいかもしれないが、良く見ると街全体の調和が取れており、すっきりした街並みによるところが大きい。話を聞くと、建物の色彩、高さ、増改築などが厳しく規制されており、看板なども掲げられないとのこと。住民にはやや不便な面もあると思うが、街づくりに対する意識と協力により成り立っている。日本に帰り統一性のない街並みや無秩序に掲げられた看板などを見ると、住民の街に対する誇りや愛着のなさを感じ、恥ずかしい思いがする。

また、アヴィニオン、オランジュ、アルルでは古代ローマ遺跡を視察した。なかでも以前から行ってみたいと思っていた3層構造の水道橋であるガール橋(高さ49m、長さ275m)を訪れ、更に幸いなことに中を歩くこともできた。現代の土木技術をして作る事が困難なこの橋を2000年前のローマ人がどのように作ったのか、当時の土木技術の高さに感銘するばかりであった。また、その他に競技場など視察したが、いずれも歴史遺産を中心とした街づくりがされ、観光地化しているが、日本のように土産物屋が雑然と軒を並べている風景とは異なっている。

スイス：自然との調和と雄大な自然

チューリッヒでは住宅地を流れる近自然工法河川の視察を行った。石積みで植物が繁茂した小川のような水路を作り、隣接する公園と区別できないような非常に緩やかに草木が繁茂する調整池など様々な試みが行われていた。日本でも参考となることは多いものの、これらをそのまま持ち込んでうまくいかず、日本各地の気候や風土にあったものにアレンジしていく必要がある。この



写真2 チューリッヒの近自然工法河川



写真3 エッグスホルン山頂へ道

辺りが建設コンサルタントの腕の見せ所となるであろう。

また、標高約3,000mのエッグスホルン山頂に登り、マッターホルンやアイガーなどの4,000m級の名峰の壮大なパノラマと眼下に広がるアレッチ氷河を見ることができ大いに感動した。しかし、山頂に辿り着くまでの道は手摺りもないゴツゴツとした岩山であり、一歩間違えれば転落死しそうな場所である。日本と違い注意を呼びかける看板や過度な防護柵もなく、「全ては自己責任で!」とのことらしい。この思想が自然との調和や美しさをいっそう引き立てているものとも思われた。

ドイツ：効率的な都市整備

ドイツでは、ウルム、シュツットガルト、ミュンヘンなどの大小の都市を見て回った。ドイツでは州毎に都市をグレード分けして効率的に整備を進めており、グレードの低い都市には大学や大病院、もちろん空港もない。州といっても今回訪れたバーデンベルグ州は九州と同じほどの広さである。しかしながら都市間は高速道路で結ばれており不便さはない。どの都市も同じレベルを求め、どの県にも空港があるが閑古鳥が泣いている日本とは大違いである。

また、途中立ち寄った小～中規模都市にも、驚くほどの賑わいがあり、地方都市に活気がない日本と全く異なっていた。中村先生の話では、効率的な都市整備と、日本のような郊外型の大型ショッピングモールなどを規制していることが理由のようである。少子高齢化、財政逼迫のなか、ドイツの都市整備を見習うべきことは多いが、合意形成をどのように進めるかが大きな課題であると感じられた。

おわりに

ここでは書けなかったが、その他にマルセイユ

ユの港湾施設、ミラノやウルムの大聖堂を中心とした街並み、ライン滝など感動的な景色に数多く巡り合うことができた。このようにヨーロッパの良いところばかりを書いたが、ふと足元を見るとゴミが散乱していたり、細かな配慮がなされていないなど、逆に日本の良いところを見つめ直す良い機会でもあった。

今回の視察を通じて何か技術が身に付いたわけではないが、色々な場所に出向き見聞し、現地の空気を感じて感性を磨くことの重要性を感じるとともに、またその感性も技術の一部であることを中村先生から教わった。また、様々な分野の方々との知り合いになり、意見交換したことが、今後の私の財産になると感じられた有意義な視察旅行であった。

最後になりますが、この視察を率いて様々な知見をご教授いただきました中村先生、WAVE、JCCAの皆様、添乗員の高橋さんのおかげで有意義な時間を過ごすことができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。



写真4 賑わいのあるウルムの街並み